

ヴァルガスの時代に於ける ブラジルの黄禍論

天理大学 矢持 善和

I. はじめに

本稿の目的は、日本からの移民がブラジルに導入される頃から30年革命後の新国家体制の樹立に並行して第二次大戦にかけて台頭してきた主にブラジルの一部の知識層から日本人に向けられた排斥の思想について、当時のブラジルの政治及び経済的背景をふまえて、分析を試みることにある。

本稿では、すでにあらゆる視点から多くの研究者によって研究発表がなされているので、ヴァルガスの独裁体制下に於ける労働市場の規制を計った労働社会立法の公布について、また第二次大戦後、その影響によって、日本人コミュニティ内において内在的な不穏状況を至らしめる原因の一つとなった主に枢軸国から移住した外国人労働者に対する数々の規制などについての深い考察は避け、それが存在したという前提での言及に留めたい。寧ろ、それよりもブラジルへの日本人移民の流れの初期の段階で、ヨーロッパに生まれた実証主義、進化論を含む社会的ダーウィン主義と結び付いた人種的理論を日本人に向けた主に北アメリカでの実態に多大な影響を受けたブラジルの一部のインテリ層の内発した日本人移民の導入を阻止しようとする動き、また後年、すでにブラジルに移住していた日本人に向けられた排斥の動きについての解説を行いたい。つまりイデオロギー的且つ民族的レベルでの支配が政府によって公然と行われ、外資の流入や外国人移民の活動を停止させた民族的ナショナリズムの高揚について、その政治・経済の歴史を媒介に社会的背景の解説を試みたいと考える。尚、当時の資料の考察については、現在まであまり研究発表がなされていない主にパラナ州におけるケースを中心に言及したい⁽¹⁾。

Ⅱ. 人種主義と民族的ナショナリズム

レイテはその著書“O Caráter Nacional Brasileira”⁽²⁾において、「人種主義と民族的ナショナリズムは和合する瞬間があるものの、両者のコンセプトは全く異なるものである。なぜなら、前者はイデオロギーの面で変移しうるものの、生物学的な性格を有しており、後者は歴史・文化・政治的解釈を有するものであるから」と述べている⁽³⁾。さらに彼は、民族的ナショナリズムは、ある全ての民衆を包括しようとする性格を有し、人種主義は反対に民衆を分離させ、ある民族によるそれ以外の民族集団の征服を正当化しようというイデオロギーである以前に、時に応じて、社会的階層の優位を正当化しようとする性格を有しているとしている。

レイテによれば、この人種主義は19世紀の後半から20世紀前半にかけて、ヨーロッパを中心とした白人種による世界征服を正当化しようとした目的によって開花したものであり、それは、もし白人種以外の民族が、生物学的に劣っているとし、高度な文明に到達することが不可能であるならば、それらの民族は白人種を主とするところの労働者としてしか生きる術がないであろうという理論づけによる⁽⁴⁾。つまり、この理論に於いてヨーロッパ人は、彼ら自身によって唱えられた民主主義や自由主義の理論との間に何ら矛盾を感じず、人種理論は自然の産物であるとしたのである。また、その人種主義はダーウィンの進化論によって正当化され、それによってヨーロッパの知識層に受容され、ブラジルに於いてはシルヴィオ・ロメロ、エウクリエス・ダ・クーニャ、アウベルト・トーレス、オリヴェイラ・ヴィアンナ、ニナ・ロドリゲス等の文芸家にも受け入れられ、そしてヴァルガス革命後のブラジルに於いて、特に反日思想を代表するアルツール・ネイヴァ、フェリックス・パチェコ、ミゲウ・コウト等に引き継がれていった。

一方、すでにブラジルに移住していた日本人に向けられた一般的見解に関する問題を扱ってみると、日本人の移民活動の初期の段階では、現地のブラジル人社会と日本人移民との間に、言語レベル及び文化レベルでの無知識・無理解などによるコミュニケーションの欠如が存在し、そのために、彼らの適応の課程には様々な困難が待ち受けていた。そして、少なくとも第二次大戦までの期間、日本人は勤勉ではあるが、ブラジル人社会への適応が困難な民族だと見なされていたといえる。

そして、30年革命期に入り、ブラジルの労働問題の扱いに国粹主義的且つ独裁主義的要素が徐々に浸透していった。

ゴメス⁽⁵⁾は、ヴァルガス政府にとって労働とは単なる生活手段ではなく、それ以上に、祖国に仕えるための手段でなくてはならなかったと述べている。そして、「労働者の義務と権利は、より良い世界建設を唱う国の理想とは調和せず、そのためには異質の祖国や理想を持つ外来者や反逆者を一掃せねばならなかった。それは労働の社会的民主主義の理念にとって伝染的可能性を含んだ危機であった。」⁽⁶⁾と、当時の様子を示している。しかし、この国内労働者の雇用機会を優先し、外国籍の労働者との衝突を避ける保護政策は、後年、労働者不足などの弊害を生み出し、社会問題へと発展していったことも付け加えられなければならない。

しかし、この国内の労働者を保護する民族的ナショナリズムの高揚は、どのようにブラジルの国民の間に浸透していったのだろうか。

カルネイロ⁽⁷⁾は、上記の新国家体制の独裁的体質と国粹主義的思想の蔓延は、直接ブラジル民衆の人種差別的な心理に結び付いたのではなく、それらは世界の国々や国内の政治的出来事に付随して浸透していったのだと論じている。それは、「19世紀には実証主義、社会的ダーウィン主義や進化論などのヨーロッパの新思想が広大な量に及ぶ皮相的な国内の文学に支えられ、国内の思想を革新してしまった。抽象的理性主義や形而上学的思索への批判を巡る実証主義的精神は、発表される全ての学識を科学的であるとしてしまった。」⁽⁸⁾ということに基づいている。

当時、ブラジルの知識層は主にスペンサーの社会的進化論の影響を受け、社会的階層の存在の正当性とヨーロッパと比較した場合のブラジルの遅れを人種的理論によって裏付けようとし、その最も大きな原因を「混血の国」という事象に結び付けた。そして、純粋なブラジル民族としてのアイデンティティーの確立のために、黒人種とその混血であるムラトをより劣った民族とし、混血化の問題を論議の中心とした。そして、1920年代から40年代にかけて、ブラジル民族の種の定義の確立のために多くの研究者が奔走したが、その際、特にユダヤ人、ドイツ人、日本人のそれぞれの民族は彼らの言う「科学的研究」の対象と見なされたのである⁽⁹⁾。

ここでブラジル民族の民族性の確立の研究に、白人種であるドイツ人が「科学的研究」の対象になっていることは、当時のカルロス・プレステスを代表とする

共産思想の支持層とインテグリズムに対するブラジルの知識層の立場を示唆しているようで興味深い。

このように、人種的理論はヨーロッパ系白人種の他人種に対する差別や支配を正当化するための科学的理論として頭角を現してきたが、カルネイロはブラジルのそれとヨーロッパの理論を「進化論がその勢力を奮い、白人種が他民族を支配することを科学的、即ち当然としたヨーロッパと同様に、ブラジルではその理論に支配層の民主主義的思想撲滅の動き及び人種差別の正当化が加えられた。コーヒー貴族層と手をくんだブラジルのブルジョア層は独裁制システムに、1937年から始まった国家構造支配の正当化の理論的回答を見出した」とその特異性を示している⁽¹⁰⁾。

カルネイロの著書からは、当時の人種混血の問題、優生種民族問題、民族キスト（移民した者が受け入れ国の文化的適応を拒否し、自ら孤立化した民族集団）の危険性や、国外からの移民活動の制御の重要性が当時の知識層の中に蔓延していたことを示しており、強いてはイエロー危機の概念も含まれていることが理解できる。

Ⅱ. ヴェルガス期以前

ブラジルに於ける近代史の素描について述べるならば、ヴェルガス「以前」と「以後の」とに於いてその政治・社会・経済的側面に大きな変化が存在することは周知の通りである。

その変革の核の一つをなしているのがコロネリズムであった⁽¹¹⁾。サンパウロ州に於いては、コーヒー産業によって潤った俗にいうコーヒー貴族が地方の権力を支配していた。しかし、実際にはそのコーヒー産業の変貌の過程が同州におけるブルジョア層の成立の過程と並行していることも事実であった。つまり、それはコーヒー経済の発展がコーヒー資本の発展でもあり、その資本がコーヒー産業の農業部門から自立した形で発展していったという事実由来するからである。

シルヴァ⁽¹²⁾は「パイオニア前線のリーダー達は最初から、コーヒーの生産だけを優先し、経営しようとは考えていなかった。彼らは生産されたコーヒーの仲買だけではなく、同時にそれらを生産する土地の所有者をも経済的な従属関係に巻き込んでいった」⁽¹³⁾と述べているが、これらのコロネル達の中には経済的に困難な状況下にあるファゼンデイロ達のために新樹の植え付けや機具類の設備融

資を行う金融機関の機能も果たしていき、そこに従属関係を生み、ブラジルに於ける初期の銀行経営に及ぶ者もあった。また、彼らは同時に連邦政府及び州政府の高官でもあり、移民局の官僚クラスであり、サントスにおける輸出会社の経営者でもあり、鉄道会社の有力な株主であり、不動産の経営も行っていった。つまり、コーヒー資本とは、同時に農業、工業、金融、商業のそれぞれの資本と同義の意味を持つ性格を有していたのである⁽¹⁴⁾。

このようなブラジルの各地におけるコロネリズムが1889年から1930年の革命に至るまでの40年間、地方の権力を支配していたが、それらの地方の民兵が連邦政府の陸軍の補助部隊となって、1918年に連邦政府軍の機構が整備されてからもなお、コロネリズムの権制は根強いものであったという。つまりこの地方への分権的指向がブラジルの各地域による経済的格差と相まって「カフェ・コン・レイテ」の体制を生み、ヴァルガス革命の起因の一端となったのである。

一方、コーヒー産業の副次的部門から始まった工業化の波は、その結果として都市部に新しいブルジョア階級を作り出していた。彼らは大土地所有制の政治的支配に対抗できるだけの力は持たず、中小の域を脱せずまだ副次的な産業の内に留まっていたが、1920年代以降、コーヒー産業の輸出経済の弱体化によって輸入代替の工業化が進み、それらの新しい勢力は着実に活動化していった。それに並行して、都市部の労働者階級も組織化され、活動力を身に付けていった。

当時のブラジルの大都市部に於ける労働者数は統計によれば、1889年には54,164人であったが、1910年には159,600人、1920年には275,512人、そして1930年には約450,000人に膨張した⁽¹⁵⁾。この年代のヨーロッパからの移民群の中には、すでにヨーロッパに於ける労働者闘争の経験を積んだ者もあり、それらのアナキストを中心にブラジルの労働者の政治的活動が展開されていった。そして、ロシアに於けるボルシェヴィッキ勝利のニュースはブラジルの労働者階級の間には社会主義思想の可能性という意味での夢を与えた⁽¹⁶⁾。

また、前述した連邦政府の陸軍の機構が整備されたことから生まれてきた、主にブラジルの各地域の中産階級から産出した若手士官らは力を結集し、国の現状の打破を目的とし、革新派に合流した。それがテネンティズムの発祥であり、このテネンティズムがヴァルガス革命の推進力となるのである。「血気さかんな若手士官は、革新の理想に燃えてはいたが初めから一貫した思想の裏付けがあったわけではない。はじめ各地で散発的に起こったテネンテの叛乱は次第に組織的な運動へと展開し、地方の革新的な政治勢力に接近してこれと手を握るようになって

てから具体的な政治目標を持つようになった」⁽¹⁷⁾。

それまで地方の分権政治の支柱とされてきたサンパウロ州とミナス州によって保たれていた中央政権の均衡が1930年3月の選挙におけるサンパウロの政治的戦略をもって破られるに至り、それまで中央政権から疎外されてきた地方の勢力は、それを契機としてリオ・グランデ・ド・スウ州のジェットウリオ・ヴァルガスを指揮者として、テネンティズムを母体として、振興の工業分野における中産階級と都市部の労働者階級の支持を得てクーデターを起こし、1930年、革命は成功を治めた。

この頃、日本からブラジルへの日本人移民の活動はそのピークを迎えていたが、同時に日本人を危険な民族と見なす批判的な記事もブラジルのマスコミで取り上げられるようになっていた。

Ⅳ. ブラジルの黄禍論

当時、国外からの移民活動を制御するために、日本人の肉体的及び文化的特色を挙げ、ブラジル文化への適応不可能な人種であると記した多くの出版物が刊行された。これらの一連の動きは、まさしく新国家体制への動乱期のブラジル社会の国粹主義と愛国主義が行動となって表面化した現象であり、彼らにとって日本人は国家統一の気運に危害をもたらす異邦人だった。

その知識層の一人であるコアラシー⁽¹⁸⁾は、第2次世界大戦時にジョルナウ・ド・コメルシオ新聞に、1924年の4月から6月にかけて掲載された日本人移民に関する記事をまとめ、“O Perigo Japonês”（『日本人の危険性』）のタイトルで176ページに亙る1冊の本を出版している。そこで彼は当時の中国とは異質な日本の強大な破壊力を持つ軍事力は西洋の作り上げた文明に対して、また人類に対して侵略の意味でこの上なく危険であるとブラジルへの日本人移民導入拒否の正当性を説いている。

その内容は、ヨーロッパ諸国や排斥時代のアメリカの繰り返しであり、コアラシーにとっての日本もしくは日本人に対する脅威とは日本の侵略主義であり、その中でも最も大きな要因は日本の土地利用の実状に本人移民に関ついであった。

1) 耕作可能な土地は全て利用され、道路建設などによって土地の譲渡の強制を受けても、彼らは驚くほど整然と田畑を整理していく。2) 集約的農業のプロセス。3) 70%以上の農家の所有地が1ヘクタールに満たない。4) 継続的な施

肥料が行われ、年間経費が高額である。5) 何よりも勤労、固執的勤労。

コアラシーは、「これらの条件では、日本人の特色でもある極端な節約生活に適應するしか生きる術がないことは明白である。この何代にも互る世代によって培われた節制主義が、民族の身体的特徴に反映され、(ブラジル国が提供する)移民の自由に即され、白人労働者をおしのけていったのである。僅かな賃金、白人の最低の生活様式である貧窮としか形容し難いサラリーで満足し、日本人移民は、白人労働者との間で生死をかけた労働競争を行い、労働不均衡などの困難な社会的問題を生み出している。こういった視点から、日本人は受け入れ国に貧困をもたらす民族である。」と記している⁽¹⁹⁾。

同じ著者によって提示されるもう1つの側面は天皇の神格化であり、それによって他のどの民族よりも優れていると信ずる日本人独自の信仰が存在することである。「故に南アメリカに移民した太陽の国の女神(天照皇大神)の子孫の蒔く小さな種が近い将来必ず芽生え、世界を制覇する」という希望を背負って来たという視点である⁽²⁰⁾。

このように、コアラシーの論説を眺めると急進的ではあるが、その頃のブラジルの知識層の日本人移民に対する立場を推測することができる。

一方、1930年から1937年の新国家体制に至り、ヴァルガスの民族的ナショナリズムを掲げた政府によって布かれた数々の法令はこれらの多くの移民の生活を脅かした。まず1932年には、10歳以下の子どもたちに対する外国語教授が禁止され、1939年にはその年齢制限が14歳以下に上げられた。この法令は、日本人コミュニティの形成の上になくってはならない日本語学校の閉鎖を招き、1940年には、外国語出版物の発行が禁止され、その後、街頭での日本語による会話までも禁止されるに至り、その状況は1946年末まで続いた。

当時、日本人移民のほとんどの人々は、直接もしくは間接的に日本から得た情報や日本人コロニー内の情報だけを信じ、決して現地の情報に頼ろうとはしなかった。その結果コミュニティ内から臣道連盟などの超国粹主義的グループを生むこととなり、戦後にはいつてから、コロニーは両極端の情報を信ずるグループに分割された。

このような状況は、反日を唱えるブラジル人知識層の活動と共にパラナ州の日本人移民をも包み込んでいた。1942年4月8日のパラナ州首都クリチバ市の新聞「ガゼッタ・ド・ポーヴォ」紙の記事からその当時の状況がうかがえる。

・「国内に繁殖するスパイ活動ガウーシャ警察に拘禁された危険な日本人」

・「サン・ジェロニモの炭坑に於いて炭坑夫・庭師として働いていた危険な日本人スパイが逮捕された。彼の所持品から彼の身元を明かす身分証明と銀行の預金通帳が発見された。彼は東京の大企業の子息であり、州の炭坑の将来性について日本に確実な情報を提供する役目を担っていたが、この危険な日本人は首都に於いて逮捕された。」

しかし、ここで興味深い事柄は、この年の4月の数日間だけで同紙上にスパイ容疑で逮捕された日本人の記事が数多く掲載されていることである。

- ・「サンパウロに於いて果物を売っていた日本人士官」1942年4月8日
- ・「ブラジルの敵パラ州の日本人」1942年4月8日
- ・「サンパウロに於ける日本人スパイの拠点」1942年4月10日
- ・「日本軍陸軍大佐パウルーで逮捕される」1942年4月18日

この時期、多くの日本人が警察に日本軍の手先であるとして逮捕され、ブラジルの新聞紙上を賑わしていた。しかし、彼らは単に故郷の写真を持っていたとか自分の家族の軍服姿の写真を持っていたために逮捕された者など、実際には、この軍国主義の煽りの中で戦争に参加していない親族を持つ者など皆無に等しく、この時期の彼らは、反日感情の犠牲になったとしか思えない。

一方、パラナ州に於ける状況も他の州とあまり相違なく、モラエス⁽²¹⁾もやはり1942年に、“A Ofensiva Japonesa no Brasil”（『ブラジルの攻撃的な日本人』）のタイトルで著書を出版しており、その中の記事を通してその頃の状況をよく把握できる。

「パラナ州に於いて、警察は飛行操縦士として日本人ショーサケ・ケベウとナリアツ・ショーデュケ（Chosake Kebal, Nariatsu Choduke）の2人を逮捕し、その仲間と思われるカマソ・サフォリ（Kamaso Sahuori）も同時に逮捕した。彼らの所持品から写真などの疑惑的物品が発見され、検察局への自白によればカマソは1937年にブラジルに渡航する以前に技師として飛行場で働いたにも拘わらず農業移民として渡伯したと述べている。また、アサイ市でも疑惑を決定づける書類を所持する日本人技師が逮捕され、フォース・デ・イグアスでも、米作農ジュオン・キウオ・ヒラヤマ（João Kiuo Hirayama）日本人操縦士が逮捕される。」⁽²²⁾

この記事の中で日本人容疑者の名前についてのひどい間違いが認められるが、これについて、でっち上げの記事であるかどうかなどの注釈を抜きにしても、パラナ州に於けるマスコミの反日感情の昂まりを察知することができる。

しかし、パラナ州に於ける日本人移民導入反対の意見は、何もこの頃に始まったわけではなく、1908年に笠戸丸によって第1回の日本人移民がサントス港に到着した頃にすでに存在していた。

アンドラデ⁽²³⁾の調査によると、1908年6月6日からクリチバ市のジアーリオ・ダ・タルデ紙に掲載された記事では、日本人移民導入について明らかに国内の労働者との職をめぐる競争が懸念されていた。

「フルミネンセのパイース紙は、その品行・道徳面や身体的耐久力を示し、日本人移民を弁護する立場を貫いている。当社の通信員の最新情報によると、パイース紙は日本人移民を現在までブラジルに導入された外国人移民の中で最も優秀であるという意見に立脚しているが、おそらくカリオカ政府は多くの人々が疑うことのできない彼らに好都合な論理を引用しているに違いない。なぜなら我々は全く反対の意見、即ち日本人は有害であり彼らよりドイツ人、イタリア人、ポーランド人、オランダ人を支持する意見を持ち合わせているからである。」⁽²⁴⁾

クリチバの知識層は、多くの理由で日本人労働者を導入することに真っ向から反対したが、その理由の中でも、まず最初に国内労働者との職をめぐる競い合いを挙げている。

「北アメリカの労働者は経済的で質素で、且つ低賃金に甘んじ、雇用主から優先される日本人労働者に敗北してしまった。ヤンキー政府は、その状況に何らかの手を講じる必要性に迫られ日の本皇帝国の子孫である移民の入国を制御しなければならなかった。」⁽²⁵⁾

日本人移民導入反対のもう1つの大きな理由は、文化及び人種の問題であり、この条件により日本人には定着性を期待できないという意見である。

「もし、日本人移民で我が国が飽和状態に陥った場合、我々の将来の人種関係はどうなるであろう？ また、彼らが彼らの持つ伝統的な家族的絆により定着が不可能であるとするならば、彼らは我々の富を彼らの祖国に移行するための強大な道具と化し、一方、もし仮に彼らが定着したとしても、彼らの種との雑婚により、我々の種に彼らの身体的特徴が混ざったならば、正直なところ、あまり鑑賞に値しないものになるだろう。もうすでに国内に存在する貧弱な種との雑婚により、どのような滑稽な品種が生まれるのだろうか？……我々は近い将来に於いて、惨死的結果を招かないためにも、サンパウロでの経験が続行しないことを望む。」⁽²⁶⁾

アンドラデは、この新聞社が、クリチバ市民の興味を引きつけるための反日記

事を2カ月にわたり連載したことを付け加えている。また、アンドラデが述べるように、クリチバのマスコミはアルツール・ネイヴァ、フェリックス・パチェコやミゲウ・コウトらの1930年から1940年代のサンパウロを代表する反日活動家の下記のような意見を先取りしていたことも事実であると認めないわけにはいかなかった。「これらの人々は、彼らの代表が述べるように、我々の国や国民の形成の手助けに来たのではない。彼らは、彼らの祖国への熱狂的な忠誠心を持ち、親交を拒み、心理的に適応不可能であり、彼らは我々の生活の場に駐留するためだけのコロニー集落、もしくは民族的キスト（適応を拒む民族的集落）を形成し、我々の純粋な心を惑わせ、我々の物全てをスパイし、我々のモラルに憎しみと吐き気を与えるためだけに来たのである。許せざる日本人。」⁽²⁷⁾

一方、これらの反日記事の氾濫の中、当時の日本人移民を奨励する意見もブラジルのマスコミに発表されている。その中でもナカダテ⁽²⁸⁾は、「ジョルナウ・ド・ブラジル」紙に掲載された記事を挙げ、何年か前にアメリカで発表された日本人の危険性についての意見は同紙では存在せず、その理由を以下のように述べている。「……なぜなら我々には太平洋に浮かぶ島々は存在せず、ブラジルにとって本当に危険なのは利用されることのない広大な土地を無益のまま放置することである。そして、これはイエロー危機ではなく、グリーン危機（無毛の森林地域を無活用のまま放置しておく危機）そのものである。」⁽²⁹⁾

ナカダテによれば、ブルーノ・ローボ教授がブラジルの知識層の中で最初に日本人移民を支持した人物であるという。1924年のアメリカ合衆国に於いて、日本人に対して施行された排斥法の導入について、ローボ氏は次のようにコメントしている。

「……北アメリカ人によって放置され、乾燥した不毛の地域を妬ましい程の広大な果樹園、素晴らしい野菜畑、そして美しい田園に変えた日本人を、それらの地域から隔離するとは何という不当行為が行われたのだろう。……我々はブラジルの国益のために、日本人移民を保護する側に立つ。なぜなら、過去に於いて、また現在に於いても、我々の国のために日本人が行っている作業は、我々にとって最も有益なものであるからである。彼らからは国際的などのような支障をも恐れることはない。この地にやって来て働き、発展し、定住し、家族を形成し、ブラジルの子どもたちの親となっていくのである。彼らのために、また彼らから生まれてくる同胞のために、人類が犯している不条理から彼らを守ることをも含む支持が彼らには価する。」⁽³⁰⁾

パラナ州南部に於いての日本人の出現は、1917年に設立されたカカトゥ・コロニーと同時期に始まる。そして、1933年になり、日本人はパラナグァ、アントニナ、カカトゥ、モレテス、アレシャンドラ、ファイスケイラ、イタキ、カショエイラなどの地域にも見うけられるようになった。

上記の地域に於いて特筆されるべきことは、これらが沿岸の地域であり、日本人を含む枢軸国からの移民は、連邦政府から第二次大戦勃発後、24時間以内に海岸線から60キロ以上離れた内陸に強制移動を余儀なくされたということである。

しかし、そういった状況下にあるにも拘わらず、筆者のフィールド及び文献調査によると、パラナ州沿岸地域からクリチバにかけて居住していた日本人に対して、州政府やクリチバ市政府からは、嫌がらせや圧迫等が見られなかったことは特筆に値する。

例えば筆者が1989年1月に実施した調査で、川瀬久氏（クリチバ在住、80歳、力行会出身、1927年渡伯）は：（要略）当時ブラジル人ばかりの中に混じって牛乳の販売業を始めたが、彼らは日本人である氏に、とても友好的で親切に接した。臣道連盟のグループは、最初サンパウロ州内において活動をしていたが、やがてパラナ州北部から南部へと流れて行き、天皇の船がパラナグァ港にやってくると吹聴したり、中には殺害されたり多くの人々がその犠牲となったが、彼と彼の家族は、ブラジル人の組合員によって、警察への通報がなされ、間一髪助けられた。彼の意見によれば、戦前また戦後における日本人に対する偏見や差別行為は、まったく感じられなかったという。クリチバに於いてはゴエス・モンテイロやマヌエル・リーバスらの政治家らがいて、彼らは常に日本人に対して寛大であったと述べている。一方、鷲田隼雄氏（クリチバ在住、82歳、元東山酒造会社支配人、1925年渡伯）は：（要略）1941年に大戦が始まってから、ドイツ人、イタリア人日本人の野菜運搬用の馬車や店、家などを壊そうとする嫌がらせが始まり、終いに東山の工場はブラジル人によって破壊されそうになったが、レオポルディーナ市長の手配により9人の警察官が派遣され、大事には至らなかった。しかし、海岸線から60キロまでの地点で生活し、クリチバまで強制的移動を余儀なくされた人々の移動中の生活は盗難や嫌がらせなどで大変なものだったという。氏は臣道連盟の話題にはいると、しばらく沈黙を続け、返答を拒否した。一方、政治の話題にはいると、ネイ・ブラガ氏はユダヤ人や日本人に対して非常に寛大で、それらの民族をパラナ州に誘致することには積極的であったという。

以上のように、パラナ州に於ける州政府やクリチバ市の日本人に対する姿勢は、

当時のマスコミの状況とは裏腹に、非常に柔軟性を示したものであったように感じられる。

その後のフィールド調査（1989・1990）によると、パラナ州北部地方に於ける日本人も移民初期の頃から存在していたものの（カンバラのバルボザ農場に最初の日本人移民が導入されたのは1914年）、そのほとんどは、天皇の船がパラナグァ港に到着すると吹聴したり、臣道連盟やそれを利用する一部のグループ情報から、その船の切符を購入するために自分たちの土地を売却した等の件を除き、日常ブラジルのマスコミ記事の影響を受けない農村部に居住していたので何ら反日的攻撃には遭遇していないと口述している⁽³¹⁾。

V. 最後に

このように、これらの問題を総合的に解釈するならば、日本人移民導入反対の意見は、北アメリカやヨーロッパでの意見の多大な影響を受けており、それらの多くの意見は、それまでブラジルの支配層や国民が経験したことも無かった政治・社会・経済面で緊迫した国際情勢の中で生まれ、思想的影響を受けたブラジルの知識層に転移したと理解できる。

そして、特にヴァルガスの時代に入り、政府が行う諸々の規制法を巧みに活用し、特権階級の支配を理論的に正当化するために、また、ブラジルの遅れを人種的に劣ったグループの存在を通して説明しようとする、主に何らかの政治的権限の誘因をもくろむ自称知識階級の人々に人種理論は受け入れられるのである。

第二次大戦に入り、ブラジルは大戦終了2カ月前の1945年6月6日に日本に宣戦を布告した。多くの日本人は、この状況下に於いて直接的な影響を受けた。そして、この影響は、日系人社会の外郭からの日系人の生活に対する圧力となっただけではなく、内在的な臣道連盟に代表されるような日本人コミュニティ内の葛藤をも生み出した。

しかし、この外国人労働者への数々の規制が布かれたヴァルガス革命前後の時期にこそ、最大規模の日本人移民がブラジルに流入し、サンパウロ州西部地方を経て、北パラナの開拓拡張前線や更に奥地の開拓前線へと移動して行ったのである。

本論に於いては断片的ではあるが、ヴァルガスの時代について、またその時代の日本人移住者に向けられた規制の基となった政治的・社会的背景についての解

説の試みを行った。確かにそれらが過去の産物であるという認識もあり得るが、しかし、これら一連の事象がブラジルの近代国家建設の足掛かりとなった時期に活発化したという認識の上で述べるならば、また近年の世界市場における日本の経済的影響力に対するマスコミのオピニオンを示唆するという認識の上で考えるならば、このテーマは現在でも非常に重要なレフェレンスの一つとして挙げられるのではないかと考える。

【注】

- (1) この論文の資料は一部、矢持善和『天理教海外布教伝導部論叢』天理時報社1992、「日本人移民：その過去と現状」の4章2「新国家体制と日本人移民」の項に掲載しているものに補足を加えている。
- (2) LEITE, Dante Moreira, "O Caráter Nacional Brasileiro", 4ª-edição, São Paulo, Pioneira, 1983
- (3) idem, ibidem, p.17
- (4) idem, ibidem, p.19
- (5) GOMES, Angela Maria Castro, "A Construção do Homem Novo" in ESTADONOVO, Rio de Janeiro, Zahar, 1982
- (6) idem, ibidem, p.162
- (7) CARNEIRO, Maria Luiza T., "O Anti-Semitismo na Era, Vargas", São Paulo, Brasiliense, 1988
- (8) idem, ibidem, p.84
- (9) idem, ibidem, p.85
- (10) idem, ibidem, p.85
- (11) 斎藤広志『ブラジルの政治』サイマル出版会、1976年。pp.18-23。
- (12) SILVA, Sergio, "Expansão Cafeeira e Origens da Indústria no Brasil", São Paulo, Alfa-Omega, 1976, p.59
- (13) idem, ibidem, pp.59-62
- (14) GARCIA, Nelson J., "Estado Novo: Ideologia e Propaganda Política", São Paulo, Loyora, 1982, pp.29-33
- (15) CARONE, Edgard, "O Estado Novo", Rio de Janeiro, São Paulo, Difel,

- 1976, p.383
apud in GARCIA, Nelson, J., idem, ibidem, p.32
- (16) GARCIA, Nelson, J., op.cit, p.32
- (17) 斎藤広志、前掲書。p.29
- (18) COARACY, Vivaldo, "O Perigo Japonês", Rio de Janeiro, Rodrigues & Cia, 1942
- (19) idem, ibidem, p.6
- (20) idem, ibidem, p.19
- (21) MORAES., Carlos de S., "A Ofensiva Japonesa no Brasil", Porto Alegre, Globo, 1942
- (22) idem, ibidem, p.219
- (23) ANDRADE, João C. de, "A Colônia Esperança : Dissertação de Mestrado apresentada pela Universidade Federal do Paraná, 1975
- (24) idem, ibidem, pp.32-33
- (25) idem, ibidem, pp.32-33
- (26) idem, ibidem, p.35
- (27) idem, ibidem, p.36
- (28) NAKADATE, Jouji, "O Japão venceu os aliados, na Segunda Guerra Mundial?", Dissertação de Mestrado pela Universidade Católica de São Paulo, 1988
- (29) idem, ibidem, p.33
- (30) LOBO, Bruno, "Japoneses no Japão e no Brasil". Rio de Janeiro, Nacional, 1926, p.170
- (31) パラナ州北部の日本人移民については YAMOCHI, Yoshikazu, "Imigração Japonesa : Ontem e Hoje - O Exemplo dos Japoneses da Comunidade Nikkei de Uraí (PR-Brasil) in STUDIES OF WORLDVIEWS No5, Nara, Tenrikyo Overseas Mission Dept., Tenri Johosha, 1992, を参照。

【上記以外の主な参考文献】

- (1) 『伯国新憲法審議会に於ける日本人移民排斥問題の経過』在伯日本人文化

協会発行、サンパウロ、1934年

- (2) 『バルガス以後：ブラジルの政治と社会（1930-1969）』社団法人ラテン・アメリカ協会、進興社、1970年
- (3) IANNI, Octavio, "Estado e Planejamento Econômico no Brasil", Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1986
- (4) MOTA, Carlos Guilherme, "Ideologia da Cultura Brasileira(1933-1974)" in Ensaio 30, São Paulo, Ática, 1985
- (5) CARNEIRO, Maria L. Tucci, "Preconceito Racial no Brasil Colônia", São Paulo, Brasiliense, 1983